『自利とは利他をいう』
―自己中心的発想から脱却―

高井法博会計事務所
TACTグループ関連12社 代表
税理士　高井法博

私は人生の師の一人、前号でもご紹介した飯塚毅先生の創設されたＴＫＣという職業会計人の団体に所属し、そこのコンピューターソフトを活用し、お客様の各種財務、経営データを出している。

そのＴＫＣの基本理念に『自利利他』がある。

一．『自利利他』の意味

飯塚先生は『自利利他』の意味を次のように解説している。

大乗仏教の経論には『自利利他』の語が実に頻繁に登場する。解釈にも諸説がある。その中で私は、『自利とは利他をいう』（最澄伝教大師伝）と解するのが最も正しいと信ずる。

仏教哲学の精髄は『相即の論理である。般若心経は『色即是空』と説くが、それは『色』を滅して『空』に至るのではなく、『色そのまま空』という真理を表現している。

同様に『自利とは利他をいう』とは、『利他』のまっただ中で『自利』を覚知すること、即ち『自利即利他』の意味である。他の説のごとく『自利と、利他と』といった並列の関係ではない。

そう解すれば自利の『自』は、単に想念としての自己を指すものではないことが分かるだろう。それは己の主体、即ち主人公である。

また、利他の『他』もただ他者の意ではない。己の五体はもちろん、眼耳鼻舌身意の『意』さえ含む一切の客体をいう。

世のため人のため、社会のために精神努力の生活に徹すること、それがそのまま自利即ち本当の自分の喜びであり幸福なのだ。

そのような心境に立ち至り、かかる本物の人物となって社会と大衆に奉仕することができれば、人は心からの生き甲斐を感じるはずである、と述べておられる。繰り返し読んでいただきたい。

二．自己中心的発想からの脱却

発展していない経営者に共通する特徴は、発想が常に自己中心的である。換言すると、人物の大小は利己心の強弱に反比例するという。即ち利己心が強ければ強いほどその人物は小さくなる。利己心が強いということは、ものを考え行動するに当たって、常に自己中心的な考え方、行動しか取れず、この発想の構造を切り換えることが大発展の原理となる。自己中心の発想から相手中心の発想に転換する必要がある。それは利他に徹することが即ち自利なのだという『自利とは利他をいう』との人間の真の生きざまに通ずることである。大人物と言われる人間は皆これを体得している。企業が発展出来るかどうかは如何に社会に、相手にお役に立っているかどうかである。

三．世のため、人のために尽くす

これもまた人生の師の一人である、京セラ創業者の稲盛和夫氏の口癖である。仏教でいう慈悲の心、キリスト教で言う愛で、会社を経営して行くうえで、また人生を歩んでいくうえで、欠かすことのできないキーワードである。事業を行う上で利は不可欠であり、これがなければ事業の存続はない。またこれは人間活動の励みにもなる。誰しも儲けたいという『欲』がある。しかし、その欲を利己の範囲にのみ留まらせてはいけない。江戸中期の思想家・石田梅岩が『利を求むるに道あり』と述べたが如く、利潤追求は決して悪くはない。ただし義にかなったものでなくてはならない、と倫理感の大切さを説いている。また、『まことの商人は、先も立ち、われも立つことを思うなり』と言う。これは商売の極意であり、『自利利他』にも通じる。

人生は一回限りのもので、しかも百年足らずのものである。この短い人生の中を、自分はどう生きたら良いのかは重大問題である。誠にいい加減な生き方をしている自分が、素晴らしい方との出逢いによってこのことを確信するに至った以上、毎日を命がけで必死に勉強し、『成功哲学』を身につけ『正しい人間の生き方』を求め続けたいと思う。そのうちの最たるものが『自利利他』の考え方であり、これを如何に自分のものとしていくかにかかっている。自利利他の哲学的確信に裏づけられた行動が展開できれば、素晴らしい人生が送れることは確信できる。できねば中途半端な人生になってしまう、と思うと身震いがする。徹底した謙虚さと自己批判に立って求め続けたいと思う。

H17.4.19　新社屋完成の際の表敬訪問時
（ショーワ(株) 水谷会長と）